

校勘という読書

赤 瀬 知 子

一

17 (赤瀬)

『新古今和歌集』編纂の余熱さめやらぬ建保三年(一二一五)十月、順徳院の命によって『内裏名所百首』という名所歌集が編まれた。名所とは、歌枕ともいい、ある地名が歌に詠まれてそこから喚起される特定のイメージとその地名とが融合したものを指す。たとえば、「宇治」には「網代」「霧」などを詠み、「井手」には「山吹」を、「吉野」には「桜」を詠む、といったことが繰り返されるうちに、そのような詠み方が一種の共通認識になっていくわけである。『内裏名所百首』では百箇所の名所が、順徳院以下十二名の歌人たちによって詠まれた。十二名とは、順徳院・僧正行意・藤原定家・藤原家衡・俊成卿女・兵衛内

侍・藤原家隆・藤原忠定・藤原知家・藤原範宗・藤原行能・藤原康光。各百首であるから、総歌数は千二百首である。ちなみに、『内裏名所百首』の伝本にはこの千二百首本のほかに、順徳院・定家・家隆の三名の歌を抜き出した三百首本、またそこに俊成卿女を加えた四百首本、さらに俊成卿女・兵衛内侍という二名の女性歌人の歌だけを抄出した二百首本、加えて順徳院、定家などの各百首のみを選び出した百首本などもある。これらのなかでも順徳院・定家・家隆という三名の歌を抜き出した三百首本は、室町時代の名所学習の書としておおいにもてはやされ、その注釈書も数種類をかぞえる^①。

室町時代の『内裏名所百首』の享受の様相を伝える例を、一例だけ掲げる。当時の碩学、一条兼良の連歌論書『連珠

合璧集』(木藤才藏・重松裕巳校注『連歌論集』) 中世の文学、昭四七・四、三弥井書店) にみえる寄合―付合ともいう。連歌や俳諧の技法で、前句のことばや物に縁のあることばを付句に付けるということがあり、そのことばの組み合わせをいう―に、「琴トアラバ…(中略) : 関のわら屋」という寄合がある。これに関して、宗祇門下の恵俊という連歌師が明応三年(一四九四)に著したという『連歌寄合』(木藤才藏・重松裕巳編著『連歌寄合集と研究(上)』未刊国文資料、昭五三・六、未刊国文資料刊行会) という付合書に次のような記載がある。

わらやに、相坂。蟬丸、相坂のわらやに住し事也。

相坂や関のわらやの琴の音はふかき梢の松風ぞふく

蟬丸は、琵琶・琴両種共に弾給ひしと也。

右にみえる「相坂や関のわらやの琴の音は」歌は、家隆が『内裏名所百首』に詠んだもの。注目すべきは、『内裏名所百首』の諸本間で第二句に異同があるということである。管見の範囲では、千二百首本の伝本のすべてと四百首本、それに三百首本の大部分の伝本が「関の庵の」(群書類従本による) という本文をとっている。それに対して、三百首本の伝本の一部のもの―たとえば、連歌師寿慶筆と伝える福井県立図書館松平文庫蔵本など―のみが「関

のわらやの」という本文をとっている。『内裏名所百首』以外の、『歌枕名寄』や『夫木和歌抄』、また藤原家隆の家集などをみても、「関の庵の」という本文をとるものが多いようである。このことから、前掲の『連歌寄合』に掲げられている歌や、『連珠合璧集』の寄合は、『内裏名所百首』の三百首本いわゆる抄出本の一部のものに基づいたとみて誤らないと思う。なお付け加えるならば、『米沢百人一首抄』(米沢古文書研究会編『米沢百人一首抄 解説と注釈』昭五一・九、米沢古文書研究会) 蟬丸歌注、『六花和歌集』(古典文庫303、三村晃功・稲田利徳・井上宗雄・島津忠夫編、昭四七・八) 一六二六歌、『六花集注』(古典文庫328、同右編、昭四九・七) 下二六歌、『六花集註』(古典文庫363、同右編、昭五二・一) 三〇七歌なども、「関のわらやの」という本文をとっている。また、「相坂や関のわらやの」歌を本歌としたと思われる歌が、松下正広(一四二二―一四九三)『松下集』(国立国会図書館蔵本、『私家集大成』6 中世IV、昭五一・五、明治書院) 一五八二に「あふ坂の関のわらやの庭つ鳥いつまで蟬の声残りけん」など見える。近世にはいると、「わらや」に「蟬丸」という付合が『世話焼草』(米谷巖編『世話焼草』、昭五一・三、ゆまに書房) に見え、この付合が固定化していった様子がうかがえる。一端を示したに過ぎ

ないが、室町時代に『内裏名所百首』の三百首の抄出本が、より簡便な名所学習書として、連歌師たちおよび彼らの周辺で享受され、彼らの歌枕についての知識や考え方に影響を与えていたであろうことがうかがわれる。^③

二

右のような背景を踏まえたうえで、小論では、千二百首本のうち、京都曼殊院の所蔵にかかる伝本を考察の対象とする。まず、千二百首本の諸本を掲げる。伝本は管見の範囲で現在、二十九点(写本二十七点、刊本二種。なお後述)を数える。それらは、順徳院以下の十二名の歌人たちの歌をどのように配列しているかということ^④を基準として、ひとまず次の三系統に分類できるように思う(書名は内題によって示し、内題のないものについては外題にしたがう。以下、準ず)。

甲系統

- (1) 国立公文書館内閣文庫蔵「内裏名所百首」、
(2) 宮内庁書陵部蔵「内裏名所百首」甲(図書番号一五
一函四二二号)、(3) 同「内裏名所百首」乙(図書番号五〇
二函一四号)、(4) 大阪市立大学附属図書館森文庫蔵「名
所百首」、(5) 熊本大学附属図書館細川家永青文庫蔵
「名所百首」、(6) 慶應義塾大学図書館蔵「建保内裏名

- 所百首和歌」、(7) 東北大学附属図書館蔵「建保内裏名
所百首和歌」、(8) 高岡市立中央図書館蔵「内裏名所百
首」、(9) 東京都立中央図書館加賀文庫蔵「内裏名所百
首」、(10) 同「建保内裏名所百首和歌」、(11) 名古屋蓬左
文庫寄託堀田文庫蔵「名所詠百首和歌」、(12) 高松宮家
旧蔵「内裏名所百首」、(13) 曼殊院蔵「内裏名所百首」、
(14) 北野天満宮蔵本、(15) 久保田淳氏蔵「内裏名所百首」、
(16) 群書類従巻第百七十一所収「内裏名所百首」

乙系統

- (17) 慶應義塾大学図書館蔵「名所百首」、(18) 東
京大学文学部国文学研究室蔵「名所百首」、(19) ノート
ルダム清心女子大学附属図書館黒川家文庫蔵「内裏名
所百首」、(20) 今治市河野信一記念文化館蔵「名所百首
和歌」、(21) 鳥原市立図書館松平文庫蔵「名所百首和歌」、
(22) 水府明德会彰考館蔵本「名所百首」、(23) 叡山文庫真
如蔵蔵「名所百首」、(24) 神宮文庫蔵「名所百首」、(25) 長
谷寺豊山文庫蔵「名所百首」、(26) 森本元子氏蔵「名所
百首」^⑤

丙系統

- (27) 国立公文書館内閣文庫蔵「内裏名所百首和
歌」、(28) 田中登氏蔵「内裏名所百首和歌」、(29) 百首部類
所収「内裏名所百首和歌」
(これらの諸本のうち、(14)・(15)・(23)・(26)に関しては、以下の考

察において部分的にふれることはあっても、詳しい検討については諸般の事情により、ひとまず後日を期することとする。なお、これらの二十九点のほかに、上賀茂神社所蔵本の存在が知られるが、それについても同様の扱いとしたい。

まず甲系統は、順徳院・僧正行意・藤原定家・藤原家衡・俊成卿女・兵衛内侍・藤原家隆・藤原忠定・藤原知家・藤原範宗・藤原行能・藤原康光という順序で歌を並べるもので、右に示したように曼殊院蔵本もこの系統に属する。ついで乙系統は、順徳院・行意・定家・家衡・家隆・忠定・知家・範宗・行能・康光・俊成卿女・兵衛内侍というように、俊成卿女と兵衛内侍との二名の女流歌人を末尾に配列するもので、内題を「名所百首」とのみ付す伝本が多い。また丙系統は、名所によって歌人の順序の変わるものが多く、配列の法則性を見出しにくいものである。なお、⑳と㉑と㉒のあいだにおいても、配列の異なる箇所がみられる。

三

曼殊院蔵本については、以前に拙稿を添えてその影印を刊行した^⑥。一冊の列帖装の写本で、縦21・1cm×横16・3cm、墨付は六十五丁、一面十一行、歌は一行書きで遊紙

は巻末に一丁のみ、楮紙系の厚手の料紙を用いている。表紙は薄茶色の無地の斐紙で、その表面に何らかの塗料様のものを塗ったかと思われる。表紙左肩に、斐紙系の紙に「建保百首」と記された薄茶色無地の題箋を貼る。巻末(65丁表)に「永正元年三月万松軒以御／本書之／沙門慈運」という識語があり、永正元年(二五〇四)に曼殊院第二十六世門主の慈運僧正が、相国寺鹿苑院の万松軒宗山等貴の所持本を底本として書写したものとみてよい。^⑦なお、慈運に関する詳しい経歴、伏見宮家との関係などについては、前記拙稿にゆずる。

この曼殊院蔵本について特に興味ぶかいのは、見せ消ちや異本注記、傍書などといった、「校勘」のあとがかなり多く見られることである。見せ消ち(301番歌「夏引の」など)による訂正箇所は百五十八箇所、「イ」と付された異本注記(246番歌「い、かだの床の」^{この}など)は百一十一箇所、傍書(823番歌「これぞ又」など)は五十六箇所に及んでいる(歌番号は曼殊院蔵本の通し番号。以下、準ず)。これらは、ひとまず曼殊院蔵本の筆者である慈運自身の手になるものと認めてよい。従来、こうした見せ消ち等は、誤写、誤脱の訂正および他本との校合にのみ使用されたと考えられてきたように思う。けれども、結論からいえば、慈運の校勘は必

ずしもそのような、いわば低次な範疇にとどまるものではなく、より高次な、すなわちきわめて積極的かつ創造的な営為であったように思われるのである。

さて、右に掲げた慈蓮の校勘について、とりわけ興味を引くのは、見せ消ち、異本注記、傍書を施された箇所の中に、長点を付されたものが七箇所みられることである。

まず、傍書された本文の右肩に長点が付されている333番の歌を取り上げてみる（本文の引用は、京都大学国語国文資料叢書三十九所収の曼殊院藏本の影印による。適宜、濁点を付した。以下、準ず）。

夕暮^{なにはえや露の玉ちる}はなにはほり江のあしのはに光を分て飛螢かな
知家（333）

夏^夕くれば難波ほり江の蘆のはにほにこそあらね秋風ぞ
ふく 範宗（334）

333番「夕暮は」歌の一・二句の右側に「なにはえや露の玉ちる」という本文が記され、その傍書に長点が付されている。つまり、333番歌については一、二句に異同があるのである。曼殊院藏本の親本には「夕暮はなにはほり江の」とあり、慈蓮が見た別の本には「なにはえや露の玉ちる」

とあったと考えられる。慈蓮は、まず親本に忠実に書写した。そのうち親本の本文を異本の本文と比較しながら、異本の本文を傍書として示した。さらに、両者の本文のいずれが優れているかを判断して、その判断の結果を、長点を付すことによって示したとみてよい。これについては、現存する『内裏名所百首』の諸本においても左記のように本文に異同がみられる。^⑧（諸本の番号は、前掲の諸本分類のそれによる。以下、準ず）。曼殊院藏本の場合、「なにはえや露の玉ちる」という傍書に付された長点は、そうした本文の異同に対する、慈蓮の判断、慈蓮の選択の意識を表すものとみて間違いないと思う。

333番歌についての諸本異同

「夕暮はなにはほり江の」とする伝本……(1)・(2)・

(3)・(5)・(9)・(12)・(15)・(16)

「夕されは難波堀江の」とする伝本……(9)・(29)

「なにはえや露の玉ちる」とする伝本……(4)・(5)異本

注記・(7)・(8)・(10)・(11)・(12)異本注記・(17)・(18)・(19)・

(20)・(21)・(22)・(25)・(26)・(27)

「なにはえや露^{も玉}ちる」とする伝本……(24)

334番歌についての諸本異同

「夏くれば」……(1)・(2)・(3)・(9)・(15)・(16)・(29)

「夕ぐれは」……(4)・(5)・(7)・(10)・(12)・(17)・(18)・(19)・

(20)・(21)・(22)・(24)・(25)・(26)

「夕されは」……(8)・(11)・(17)異本注記・(22)異本注記・

(27)

それでは、慈運はなぜ、この333番歌の一・二句について、「夕暮はなにはほり江の」よりも「なにはえや露の玉ちる」の方が優れていると考えたのだろうか。このことは、333番歌の次の334番「夏くれば」歌から推測できるように思う。この334番歌も初句に異同があり、曼殊院蔵本ではさきに掲げたように、「夏くれば」の「夏」に見せ消ちが施され、右側に「夕」という傍書、およびそれに付された長点がある。これは、次のように解釈できる。334番歌を記す際、曼殊院蔵本は、まず親本に忠実に、初句を「夏くれば」とする歌を記したと思われる。(16)群書類従本などでも、初句を「夏くれば」としている。これに対して、慈運の見た異本には、初句が「夕ぐれは」となっていたと考えられる。右に示したように、現存する『内裏名所百首』の諸本のうち、(22)水府明徳会彰考館蔵本などが「夕ぐれは」という本文を採っている。慈運ははじめ「夏くれば」としたのだが、そうすると第五句「秋風ぞふく」に対して、いささか不自然になってしまう。そこで慈運は、異本に記されていた

「夕ぐれは」という初句を採用して、「夏くれば」の右側に「夕」と記した。と同時に、「夏」には見せ消ちを施し、重ねて「夕」に長点を付した。それは、「夕ぐれは」という本文の方がより優れているという、慈運の選択の意識を示したものと考えられるのではあるまいか。

話を戻して、慈運はどのように334番歌に「夕ぐれは難波ほり江の蘆のはに」という本文を採用した。とすると、この本文はその直前の333番歌の上句「夕暮はなにはほり江のあしのはに」、つまり曼殊院蔵本の親本に由来するであろう本文と、まったく同じものになってしまう。そこで慈運は、333番歌については異本の本文、「なにはえや露の玉ちる」という本文の方が望ましいと考えて、傍書「なにはえや露の玉ちる」に長点を付した、と推測できるように思うのである。

このように、慈運が334番歌を校勘した後に、333番歌について考えたと推測するのは、やや深読みに過ぎるかもしれない。けれども、重要なことは、この333番歌・334番歌の傍書や見せ消ちに伴われて付されている長点が、慈運の選択の意識を表していると考えられることである。いいかえれば、慈運の校勘の作業は、彼の選択の意識を通しつつなされたものであって、これらの長点にその意識が表だった形

となって投影していると考えられるのである。

四

他の例においても同様のことがいえる。異本注記に長点が付されている箇所について検討してみる。

たこのうらの底さへかけてにほふらんうらの藤波た、
ぬ日ぞなき 春イ 行意 (218)

諸本異同

「うらの藤波」……(1)・(3)・(4)・(5)・(6)・(9)・(12)・
(15)・(16)

「春の藤波」……(2)・(5)傍書・(6)異本注記・(7)・
(8)・(9)傍書・(10)・(11)・(12)異本注記・(17)・(18)・(19)・
(20)・(21)・(22)・(24)・(25)・(26)・(27)・(28)・(29)

『内裏名所百首』においては、各名所ごとに名所名の下に小字でその名所の所在地の国名が書かれている。この「たこのうら(田籠浦)」について、慈運はどうやら初め「駿河国」と書き、のちにその「駿河」を擦り消してその上から「越中」と書いているようであるが、断言はできない。「たこのうら(田籠浦)」を詠んだ『内裏名所百首』の他の十一首をみても、越中国の「たこのうら(多祐浦)」を詠んだと考えられるもの、駿河国の「たこのうら(田子

浦)」を詠んだと考えられるものの両方があるようである。^⑨ この218番歌も越中国のそれによく詠まれる「藤波」と、駿河国の名所に多い「うら…波」の双方が詠まれていて、いずれの国の「たこ(こ)のうら」とも決しがたい。定家の時代、名所をよむ場合、各歌人たちにどのような共通認識が存在したのか、そういうことについてもより深く考察を加える必要があると思うが、小論の趣旨からややずれるため、別稿を期したい。

それはともかくとして、この218番歌の場合、慈運は「たこ(こ)のうらの」と「うらの藤波」という、重複めいたことばを避けて、第三句に「春の藤波」という異本の本文を選択したとみてよいと思う。

次に、見せ消ちに長点が伴っている³⁵³番歌をとりあげる。
夏^{うら}かげに秋をまつらの山の蟬そめの^ぬこすえの露になく
なり 俊成卿女 (353)

諸本異同^⑩

初句「夏かげに」……(1)・(2)・(3)・(4)・(5)・(9)

異本注記・(10)異本注記・(15)・(16)・(29)

「夏の陰に」……(11)

「夏かげに」……(9)・(12)

「うらかぜに」……(5)異本注記・(6)異本注記・

(7)・(8)・(10)・(12)異本注記・(18)・(19)・(25)・(26)
 「浪風に」……(17)・(20)・(21)・(22)・(24)・(25)異本注
 記・(28)

第四句「そめのこすえ(ゑ)の」^①……(1)・(2)・(3)・

(5)見せ消ち以前の本文・(9)異本注記・(12)傍
 書・(15)・(16)・(29)

「そめぬこすえ(ゑ)の」……(4)・(5)見せ消
 ち以後の本文・(6)・(7)・(8)・(9)・(10)・(11)・
 (12)・(17)・(18)・(19)・(20)・(21)・(22)・(24)・(25)・
 (26)・(28)

この353番「夏かげに」歌の初句と第四句に見せ消ちがほ
 どこされ、初句には長点も付されている。まず初句につい
 ては、慈運ははじめに「夏かげに」と記し、次に見せ消ち
 の記号を用いて「うらかぜに」と右側に記し、その「うら
 かげに」という本文に長点を付しているのである。ただし、
 慈運がなぜ「うらかぜに」という本文の方を良しとしたの
 か、その理由については判然としない。ともあれ、この初
 句についても右に示したように、諸本に異同がある。

けれども、ここで注目しておきたいのは、むしろ第四句
 にみえる見せ消ちである。曼殊院蔵本の親本には「そめの
 こすえ(ゑ)の」、すなわちその意をとれば「そめ残す枝

の」と記されてあったと思われる、(16)群書類従本なども「そ
 め残す枝の」の本文をとっている。一方、慈運の見た異本
 には「そめぬこすえ(ゑ)の」、すなわち「そめぬ梢の」
 とあったと考えられ、これは(22)水府明徳会彰考館蔵本など
 の本文に照応する。

このことは次のように考えうると思う。つまり、慈運は
 まず親本に忠実に「そめ残す枝の」と記しておいたところ、
 異本に「そめぬ梢の」という本文を見いだしたので、それ
 を「そめ残す枝の」の「残す」の「の」の右側に、「ぬ」
 とだけ記して示した。その上で「そめ残す枝の」と「そめ
 ぬ梢の」とを比較して考えてみると、「そめ残す枝」、ある
 いは仮に「染めの梢」であっても、それは「そめぬ梢」に
 比べて、歌のことばとして未熟で不適当であると判断し、
 その選択の結果を、「そめ残す枝の」の「残す」の「の」
 に見せ消ちをほどこすことによって示した、と推測しうる
 ように思うのである。すなわち、この場合の見せ消ちは、
 単なる誤写の訂正といったことではなく、先に述べてきた
 長点と同じく、慈運の選択の意識を示しているものとみな
 しうるように思う。そういった点からすれば、同じ353番歌
 の初句だとか、第三章で述べた334番歌の初句などの場合、
 見せ消ちを施したうえにさらに長点を付しているのは、慈

五

これらの見せ消ちについて、見せ消ち以後の本文が諸本のうち、どのような伝本に多く一致しているのかを調べてみた。それとともに、曼殊院藏本の異本注記や傍書についても同様の調査をしたものが、次表である（伝本に付した算用数字は、第二章に示した表の通りである。紙面の都合上、伝本の名称は省略して示す。なお、異本注記と傍書については漢字で記された本文を仮名に変えたにすぎない例やその逆の例などを除くと、百十箇所の異本注記、および二十三箇所の傍書が残る）。

	伝本	見せ消ち	異本注記	傍書
甲系統		(箇所)	(箇所)	(箇所)
(1) 内閣文庫蔵本	42		24	6
(2) 宮内庁書陵部甲本	20		13	6
(3) 宮内庁書陵部乙本	42		23	5
(4) 大阪市大蔵本	33		14	10
(5) 熊本大蔵本	47		33	6
(6) 慶應義塾大蔵本	31		20	9
(7) 東北大蔵本	37		20	15
(8) 高岡市図書館蔵本	88		81	19
(9) 加賀文庫蔵本	65		57	9

(10) 加賀文庫蔵本	91	32	18
(11) 堀田文庫蔵本	65	54	11
(12) 高松宮家旧蔵本	50	30	4
(16) 群書類従本	69	33	10
乙系統			
(17) 慶應義塾大蔵本	93	67	19
(18) 東大蔵本	85	71	23
(19) 清心女子大蔵本	86	66	23
(20) 河野記念文化館蔵本	93	60	22
(21) 島原松平文庫蔵本	88	59	22
(22) 彰考館蔵本	91	71	20
(24) 神宮文庫蔵本	85	70	22
(25) 長谷寺蔵本	89	68	23
丙系統			
(27) 内閣文庫蔵本	86	64	19
(28) 田中登氏蔵本	83	65	16
(29) 百首部類所収本	78	61	17

この表をみると、見せ消ち以後の本文に一致することの多い伝本は、乙系統と丙系統の伝本、それに甲系統に属する、(8)高岡市立中央図書館蔵本や、(10)東京都立中央図書館加賀文庫蔵本などとなっている。そして実に興味深いこと

には、それらの伝本は、同時に、おおむね異本注記や傍書とも一致する率が高いのである。

一般に、見せ消ちと、異本注記や傍書とは、別次元のものとして扱われる場合が多いように見受けられる。しかしながら、このような比較の全体的な傾向からみても、曼殊院蔵本を書写した慈運にとつての、見せ消ちと異本注記・傍書とは、そうした一般の概念によつてはいささか処理しにくい面があるようだ。つまり、慈運にとつては、見せ消ちと異本注記・傍書とは、対立異文を並記するだけにとどめるか、それとも、対立異文を選択することによつて——その選択の意識を表すものが見せ消ちであつたわけだが——それによつて、親本の本文を改変するに至るか、という段階的な差違にすぎなかつたという可能性も少なくないように思われる。なお、曼殊院蔵本の見せ消ちのなかには、次のような例もある。

晴ぬまに先秋霧を立こめてしかまの市にいづる里人

藤原定家(115)

この歌では、見せ消ち以後の「あさ」の次に、「イ」という記号がうすく残っている(傍線部)。いったん記され、のちに消されたらしい。

おほろげの春の色とやみしま江の波もかすみてやどる

よの月

藤原行能 (119)

「春の色とや」の「や」の左側に、見せ消ちがうすく残っている。いったん施されて、のちに消されたものらしい。夕がすみをのれが空に立まよひいづちよるべく波ち尋ん

藤原範宗 (742)

「空」という文字の左側に、見せ消ちがうすく残っている。

こうしたことどもも、見せ消ちが、異本注記や傍書と共通する面を持っていたために、相互に転換することが可能であったと考えると理解しやすいのではあるまいか。¹³ あえて重複を承知の上で述べると、曼殊院藏本を校勘する際、慈運は、対立異文を並記する際には異本注記や傍書として示した。そして見せ消ちは、単なる誤写の訂正ばかりではなく、対立異文を選択することによって親本の本文を改変する、その選択の意識を表す記号としても用いた。つまり見せ消ちは、異本注記や傍書の次なる段階、本文の選択という、より高次の批評的段階を示す記号として用いることが多かったと考えられるのである。

六

従来、校勘とは、誤写を訂正し、また、親本の欠陥を他

の伝本によって補おうとするもので、校勘する主体が主体的に関わることの少ない、いわば没個性的な作業として理解されることが少なくなかったように思う。たとえば『広辞苑』第四版を見ると、「校勘」の意味として、「くらべかえんがえること。特に古典の刊本または写本をくらべ合せて、その誤りを正し、或いは相互の異同を調べ、できるだけその本の原本の形を再現しようとすること」と記されている。けれども、校勘についてのこうしたイメージは、現代のわたくしたちが行う校訂作業の姿を、過去の校勘に投影したものに過ぎないのではないだろうか。

これに対して、曼殊院藏『内裏名所百首』にみられる慈運の校勘の姿は、よりよい本文を選択しようとする主体的な営みであったと考えられる。しかもその「よりよい本文」とは、わたくしたちが校訂作業において求める、「厳密な本文」「原典により近い本文」といったたぐいのものとは、少しく趣を異にしていたようだ。つまり、慈運の校勘と、わたくしたちの校勘＝校訂作業とは、その志向するところが、いささか隔たっているように思える。

いま結論だけを先にのべると、慈運のこうした校勘は、彼自身の志向に基づいたものとみてよいように思う。いいかえると、慈運は、見せ消ち、また時には長点という、選

沢の記号を用いることによって、『内裏名所百首』に対する、慈蓮自身の読みを示そうとした、と考えられると思う。つまり、曼殊院蔵本にみられる多くの見せ消ちは、『内裏名所百首』をどのように読むべきかという問題に対する、慈蓮の考えの現れ、慈蓮の主體的な読みの呈示として、理解できるのではあるまいか。すなわち、慈蓮にとって、校勘という行為は、作品を自分なりに主體的に解釈することつまりは、ひとつの読書であったと位置づけることができるように思う。もちろん、こうしたことを述べるためには、慈蓮のさまざまな読書体験が、どのように『内裏名所百首』の見せ消ちに影響をあたえているか、といった裏付けが要求されるわけだが、それについては、いずれ別稿にて詳述したい。

註

- ① 京都大学国語国文資料叢書三十五『内裏名所百首注 疎竹文庫蔵』（昭五七・一一、臨川書店）解説拙稿。同三十九『内裏名所百首 曼殊院蔵』（昭五八・四、臨川書店）解説拙稿。ただし、森本元子・田村柳壹編『内裏名所百首』（古典文庫496、昭六三・一二）所収の「建保三年内裏名所百首考——解説に代えて——」において田村氏は、五百首本の存在を指摘しておられるが、未見。また、千二百首本から三百首

本へという成立順序については疑問を提起しておられる。首肯すべき点も多く、今後の課題といえよう。なお、最近、宗祇筆とされる『内裏名所百首』の三百首本の古筆切が、あいついで古書目録に紹介された。ひとつは『思文閣墨跡目録』第三〇七号（平一〇・一、思文閣）に「浜名橋」三首、またひとつは同第三〇九号（平一〇・三、思文閣）に「高円野」三首。いずれも順徳院・定家・家隆の歌をその順序で載せるこれも当時の三百首本の広がりを示す好例のひとつとみてよからう。

- ② 同様の例は、はやく『土御門院御集』（『私家集大成』3 中世Ⅰ、昭四九・七、明治書院）三八九に「逢坂のせきのわらやは跡もなし秋のしらへを松にのこして」、「伏見院御集」（東山御文庫蔵本一七八・六・一・二、『私家集大成』5 中世Ⅲ、昭四九・一一、明治書院）一八九に「あふさかやせきのわらやはあともなしなさはかりそ名をと、めける」などにもみられる。注①、③とも関わって、三百首本の成立についてこれからの検討が必要なところであろう。

- ③ 昭和五十七年度京都大学国文学会（昭五七・一一）口頭発表「『内裏名所百首』の享受をめぐって」、名古屋・中世文学研究会（昭五八・六）口頭発表「校勘という読書」。加えて、『内裏名所百首』を歌枕学習書とみる見方は、あるいは室町時代以前にさかのぼりうるかも知れない。南北朝期に尊円親王が初歩学習用の手本として、千代菊という幼名を持つ者に書き与えたとされる『拾要抄』（『日本教科書大系』往来編

第2巻 古往来(二)、昭四二・五、講談社)に、「百首建保三年 公宴 内裏十月廿四日」として、『内裏名所百首』の名所百題が掲げられている。このことからみても、『内裏名所百首』はすでに南北朝期には、もっとも基本的な、いわば初心者のための名所歌集とみなされていた可能性もある。

④ 注①に掲げた古典文庫496のなかで、田村氏も順序こそ異なるがほぼ同じ分類をされている。

⑤ 前掲古典文庫496に翻刻が、古典文庫496別冊に複製が掲載されている。

⑥ 注①に示した、京都大学国語国文資料叢書三十九『内裏名所百首 曼殊院蔵』のこと。

⑦ 慈運が文亀三年(一五〇三)、つまり曼殊院蔵本を写する前年にすでに『内裏名所百首』に関心をいだいていたことについては、注⑥に掲げた拙稿のなかで詳述した。

⑧ (6)慶應義塾大学図書館蔵本には、この歌を「なには江やつゆの玉ちるあしの葉にはこそあらねあきかぜぞふく」と記し、333番歌と334番歌が一首になったような形をとり、「難波江」の歌は一首少なく、全部で十一首しかない。また、²⁶⁸田中登氏蔵本は、知家の歌として「夕されは難波ほり江のあしの葉にはこそあらね秋風ぞふく」、範宗の歌として「夕暮は難波ほり江のあしのはにあらね秋風ぞ吹」と、これも333番歌と334番歌が合体したような歌を、二首掲げている。したがってこの二伝本を、333番歌と334番歌の異同の考察からひとまず除外した。なお、⁽¹⁹⁾ノートルダム清心女子大学附属図

書館黒川家文庫蔵本、⁽²⁶⁾森本元子氏蔵本、⁽²⁷⁾国立公文書館内閣文庫蔵本においては、知家の歌と範宗の歌が入れかわっている。

⑨ 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』(昭五八・一二、角川書店)によると、越中国の「たこのうら(多祢浦)」は、『万葉集』巻第一九の「藤波の影なす海の底清み沈く石をも玉とそ我が見る」(四一九九、大伴家持)、「多祢の浦の底さへにはふ藤波をかざして行かむ見ぬ人のため」(四二〇〇、内蔵忌寸縄麻呂)などに藤の花が詠まれたことにより、平安時代以降も藤の名所としてよく詠まれたという。一方、駿河国の「たこのうら(田子浦)」は、『百人一首』にも入って有名な『万葉集』巻第三の「田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ富士の高嶺に雪は降りける」(三三八、山部赤人)の影響で、ひとつには「富士」とともに詠むことがあったという。また、『古今和歌集』巻第一一恋歌一の「駿河なる田子の浦波たたぬ日はあれども君を恋ひぬ日はなし」(四八九、読人しらす)を受けて、「浦波」とともに詠むことも多かった。他に「田子(農夫)」と掛けて詠まれたり、単に春の季節を詠む叙景歌にも用いられたという。

ちなみに『内裏名所百首』の「田籠浦」の十二首について、どのような景物が詠まれているかをみてみると、「藤波」「藤の花」「藤」などを詠んだもの六首(217・218・220・225・226・227)、「浦波」「うら……波」「浪」などを詠んだものの八首(218・219・221・222・224・225・226・227)、「田子」一首(223)、

また春の叙景歌は 219・221・222・228 ほか。

⑩ ②7 国立公文書館内閣文庫蔵本では、俊成卿女の歌は家衡の歌と同じ「さよ姫のひれふる袖もや、涼し秋をまつらの山のかぜ」が記されている。したがって、諸本異同の一覧表には載せなかった。

⑪ ⑫ 高松宮家旧蔵本では、「染ぬ梢の」というように、「ぬ」の右下に異本注記を示すと思われる「イ」という記号が付されている。

⑫ 同様の例を二、三掲げると、

たかさこの松もふりにし昔まではのかにむすぶ春のよの月
 俊成卿女 (29)

ながむれば冬ぞすみける鏡山木の葉時雨にちりかゝる
 兵衛内侍 (714)

なき名のみ世にはたかしの浜風のつれなき色に恋やわたらん
 藤原知家 (801)

これらも字体の類似からの誤写とは考えにくく、しかも、見せ消ち以前および見せ消ち以後の、両方の本文に対応する伝本がある（二首目の「ながむれば」歌について、今問題としているのは第二句の見せ消ち。第五句にみえる墨による抹消は他の歌にも数箇所みえるが、これは明らかに見せ消ちとは呼べないので、見せ消ちのなかには含めていない。ただし、こうした抹消についても、抹消以前の本文および抹消以後の本文のいずれもが、他の伝本の本文と一致している場合が多く、別に機会を設けて考える必要があるように思う）。